

平成25年8月14日

## 農作物の高温と少雨対策

環境農業推進課  
産地・流通支援課

### 稲

#### ○早期水稻

ア 収穫前の落水は、「コシヒカリ」は出穂後20日頃を目安とし、それまでは間断かん水を行う。落水以降、土壌の乾燥が甚だしい場合は枯れ熟れとならないよう、気温の低い時間帯に水を走らせる。

#### ○普通期水稻

ア 中干し後のかん水は、根に急激な変化を与えないように、かん水と排水を2～3度繰り返す。

イ 幼穂形成期～開花期は、最も水分を必要とする時期であるが、高温により地温が上昇し土壌の還元が進み、根腐れが激しくなる時期でもある。そのため、浅水にして、時々根に酸素を供給する。

### 露地野菜

ア 敷き草や敷ワラ及びマルチングを充分行い、土壌水分を保つ。

イ かん水や葉面散布は、日中を避け朝夕の地温の低い時間帯に行う。河川水をかん水に利用する場合は、ショウガでは根茎腐敗病、シシトウ、ピーマンでは疫病の発生の危険性があるので、これらの品目では使用を避ける。また、畝間かん水は湛水ではなく、かけ流しで行う。草勢が弱っている場合は薄い液肥を加える。

ウ 草勢が弱っている果菜類での収穫は、やや若採りとし、変形果などの不要なものは早めに摘果して、着果負担を軽減する。

エ 乾燥が続くとアブラムシやダニ類、ハスモンヨトウ、ミナミキイロアザミウマ、アワノメイガ、オオタバコガなど害虫の発生が多くなるので、防除に努める。

オ 薬剤散布は、日中の高温時には薬害の恐れがあるので、夕方の温度が下がった時間に行う。なお、薬剤散布に先立ってかん水をしておくと、薬害の発生を少なくすることができる。

カ 土壌の乾燥に伴う、カルシウム欠乏、ホウ素欠乏等の生理障害対策として、必要に応じて葉面散布を行う。

## 花き

- ア 育苗用のクーラーハウスでは、日中、設定温度を超える場合は3重被覆を行い、冷房空間を小さくする。また、可能な場合には鉢上げを行い大苗での定植を行う。
- イ 循環扇の活用やハウス妻面の開放などを行い、十分換気を行う。
- ウ ケイントップや切りワラ等でマルチングを行い土壌水分を保つ。
- エ 寒冷紗や遮光資材を用いて気温や地温、植物体の温度上昇を抑える。遮熱効果の高い遮光資材なども活用する。また、あらかじめ地温を下げておくため、定植前から遮光しておく。
- オ かん水は、日中を避け、気温の下がった夕方に行う。
- カ 定植後は強いピンチは避け、高節位でのソフトピンチを行う。また、株を刈り込む場合には、数本残して刈り込むか、高い位置で行う。
- キ ハウス内にミスト設備がある場合は、一定時間ごとに（葉面が乾いたら細霧する）細霧を発生させ、気化熱で葉温を低下させる。
- ク 乾燥が続くとアザミウマ類、アブラムシ類、ハダニ、ヨトウ類の発生が多くなるので早期の防除に努める。

## 果樹

- ア 用水の確保に努め、敷ワラ、敷草等により、土壌水分の蒸散防止と保水に努める。草生園においては、草刈りを実施し雑草からの蒸散防止に努める。
- イ かん水は日中を避け、気温の下がった夕方に行う。かん水量は1回当たり20～30mm、5日間隔を目安に実施する。少ない水を効果的に使用するには、点滴かん水を行うと良い。
- ウ 防水透湿性シートによるマルチ栽培を行っている園地においては、かん水チューブによりドリップかんがい等を行う。
- エ 果実の日焼け等の防止のため、適切なかん水のほか各種資材による遮光等の対策を講じる。
- オ 干ばつ時に発生し易いハダニ類やサビダニ類の発生に十分注意し、発生初期からの薬剤防除に努める。
- カ 着色遅延による収穫期の遅れとそれに伴う果実の過熟に注意し、適期収穫に努める。